



CONTENTS

-
- 01 歴代館長からのメッセージ
-
- 09 コロナウイルス感染防止による臨時休館、再開について
-
- 11 『北大総合博物館のすごい標本』発刊
-
- 12 豪雨で被災した前原勘次郎コレクション
(植物標本)の修復作業
-
- 13 プレスリリース イチヤクソウのアルビノを札幌で発見
-
- 14 プレスリリース 北極圏の植物食性恐竜・
エドモントサウルスの全貌が明らかに
-

歴代館長からのメッセージ

創設20周年を記念して、歴代館長から館長時代の思い出や今後の当館への思いについてご寄稿いただきました。

歴代館長からのメッセージ①

小澤 丈夫

(北海道大学総合博物館長)

●在任期間：2019年4月～



開館20周年を迎えて

北海道大学総合博物館は、2019年をもって創設20周年を迎えました。また、本総合博物館がある旧理学部本館は、1929年11月に竣工した歴史的建造物で、同年に築90年となりました。この20年間、多くの教職員、ボランティア、同窓生の皆様方をはじめ、学内外の方々のご支援を得て、本館は着実に発展を重ねて参りました。特に、耐震化改修工事による1年余りにわたる全面休館を経て迎えた、2016年7月のリニューアルオープンは大きな節目となりました。展示内容とインテリアの一新はもちろんのこと、カフェ、ショップ、バリアフリー化などアメニティや機能面の充実が加わり、本館は多くの来館者をお迎えするホスピタリティ溢れる博物

館に生まれかわりました。現在、常設展示には、札幌農学校以来の本学歴史を展示する“北大の歴史”、北大全12学部の教育・研究と世界に誇る挑戦的な研究内容を紹介する“北大のいま”、博物館バックヤードの一部を見せる“ミュージアムラボ”、標本を実際に手にとることができる“感じる展示室”、約300万点の標本・資料の一部を公開する“収蔵標本の世界”があり、これに加えて、様々なテーマによる“企画展示”が期間限定で開催されています。運営は、専任・兼任教職員の他、60名程の資料部研究員、250名程のボランティアスタッフらに支えられています。来館者は年々増加し、2019年度には年間22万人を超えるに至りました。

このように順調な発展を重ねてきた本館ですが、2020年は大きな試練の年となりました。世界的規模の新型コロナウイルスの

感染拡大により、社会状況は一変しました。北海道においても3月より感染拡大が深刻化し、2020年度は、人と人との接触を極力避けるために、大学全体の教育・研究活動が大きな制約のもとに行われ、本館も長期にわたる休館を余儀なくされました。しかしながら、多くの教職員とスタッフの努力に支えられ、感染拡大防止策を徹底した上で、開館の再開や、モノ・コト・ヒトを直接扱う大学総合博物館ならではの対面授業の実施など、コロナ禍において最大限可能な教育・研究活動を継続してきました。おかげさまで、来館者や授業受講者からは、このような活動への前向きなご感想を頂くことができました。しかしながら、当初予定していた創立20周年を記念したシンポジウムの開催は断念せざるを得ませんでした。シンポジウムでは、歴代館長にご講演頂き、これまでの振り返りかえりと今度の大学総合博物館のあり方を議論する企画を予定していましたが、開催断念を受けて、代わりに歴代館長に書面で本館に対する想いや展望を語って頂くことにしました。

本館が創設21年目を踏み出したこのタイミングで、本学では2020年10月に賣金清博新総長が着任し、大学執行部と運営体制が一新されました。新総長は、本学の発展のために、地域への貢献や多様なステークホルダーとの協働をより一層求めることを、方針のひとつとして打ち出しています。また、北海道大学は、2026年に創基150年を迎えます。このような時代の節目と、新型コロナウイルス感染拡大によって大きく変わりつつある現代社会において、本館が、北海道大学の顔となる大学総合博物館として、これからどのような役割を担っていくべきか、今まさに問われている時期に来ていることは間違いないでしょう。これまで以上にスタッフと関係者が一丸となり、広く学内外の皆様と協働しながら、本館が、北海道大学はもとより、地域、わが国、世界の教育・研究の発展と豊かな社会の創造に資する総合博物館となることを目指し、一步一步前に進んでいきたいと思っています。

歴代館長からのメッセージ②

今村 央

(北海道大学総合博物館水産科学館長)

●在任期間：2016年4月～

水産科学館は北大函館キャンパスに位置する総合博物館の分館です。総合博物館開館20周年にちなみ、総合博物館とともに歩んできた水産科学館の20年を振り返ってみたいと思います。

まず水産科学館の歴史について簡単に紹介します。水産科学館は水産学部の展示施設として1958年7月に開館されました(当時の名称は水産博物館、1964年に水産資料館に改称)。さらに1983年3月に水産資料館別館が開館し、1988年には旧北洋水産研究施設が改装され、水産資料館附属の水産生物標本館として整備されました(この標本館は老朽化が激しくすでに解体されており、2016年2月に竣工した新標本館がその役目を引き継いでいます。1958年に建築された本館も老朽化が著しく2015年12月から立ち入りが禁止・閉館されています)。そして1999年4月、総合博物館が設置され、水産資料館は機能的には総合博物館の機構下に入りました。総合博物館との連携をより強固なものにするため、水産資料館は2007年4月に正式に総合博物館の分館と位置づけられ、それに伴い名称が水産科学館に変更され、現在に至っています。

水産科学館と総合博物館の連携は2001年の総合博物館開館から本格化します。主なものを簡単に紹介すると、開館時の常設展示や、2003年に開催された企画展示「魚類の多様性—5億年の魚類の歴史」で水産科学館の魚類標本が用いられ、特に後者では当時水産科学研究院の教員で構成されていた「水産科学館委員会」の委員が解説パネルや図録の執筆にご協力下さいました。2003年と2005年には総合博物館が招聘した魚類分類学を専門とする外国人客員教授が水産科学館の魚類標本を多数観察し、多くの研究成果を得ています。

両館の連携は2007年の水産科学館の分館化以降、さらに強化・双方向化されます。例えば、2007年12月から2008年2月に開催された企画展示「水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史」ではそのタイトル通り、水産科学館に保管される漁具や船模型などの多くの資料が両館スタッフの協力のもとに展示されました。両館が連携した企画展示として、その後も2009年の「生物多様な部屋—北大の分類学の系譜」と「疋田豊治ガラス乾板写真展」、2014年の「学船—洋上のキャンパスおしよる丸」などが開催されています。このうち、「学船」は水

産科学館での展示を皮切りに総合博物館などで巡回展示を行った企画です。これとは逆に、2017年に水産科学館で開催された企画展示「ランの王国」は、前年に総合博物館で開催された記念企画展を巡回展示したものです。客員教授としては3名の外国人研究者(それぞれ2008年12月—2009年3月、2012年、2013年10月—2014年1月)が函館キャンパスにて水産科学館の魚類標本を観察しています。両館の連携は国内にとどまらず、タイ王国で開催された科学技術博覧会(2013年と2015年はバンコク、2014年はチェンマイ)などでも共同で展示、講演会、生物調査を実施しています。

以上、いくつかの具体例をご紹介しましたが、他にも「魚類パラタクソノミスト養成講座」、「ミュージアムマイスター認定コース」、「博物館実習」などでも多くの、そしてさまざまな連携が双方向的に行われており、両館の繋がりがいかに強固であるか、そして20年の間に築かれた実績がいかに多いか、改めて実感する次第です。これらの実績・経験を生かし、今後両館がさらに力強く連携できるよう、微力ながら当事者の一人として尽力する所存です。今後ともよろしく願い申し上げます。



水産科学館本館(1960年頃撮影)



水産科学館本館(2003年撮影)

歴代館長からのメッセージ③

小泉 格

(北海道大学総合博物館初代館長)

●在任期間:1999年4月～2001年3月



看板:西村事務局長・丹保総長・小泉館長

北海道大学総合博物館は、平成11年(1999年)に「学内共同教育研究施設」として設置され、4月1日に旧理学部本館玄関に総合博物館の看板が掲げられた。翌年(2000年)11月下旬には、様似町南組からアポイ岳のかんらん岩の門評が寄贈されて、本館前に設置された。令和元年(2019年)は総合博物館の設置から20年目であることから、設置創業期の状況を以下に記述する(詳細:北海道大学総合博物館ニュース、第1号、平成11年7月31日、ISSN 1345-059X)。

北海道大学における学術標本と資料の収集・整理・保存・活用のために、施設計画委員会・資料館専門委員会が昭和63年(1988年)12月に作成した「学術資料館に関する答申書」に、学術資料館として全学合意のもとに理学部本館を移転・改修して使用することが明記され、踏襲されてきた。理学部本館は、鉄筋コンクリート3階建て、延べ床面積1万㎡以上で昭和4年(1929年)に竣工された。ゴシック様式とロマネスク様式を合わせたデザインは、旧帝国大学の特徴的な建築であり、保存建物に指定されていることから、建設当時の外観を残し、内部は博物館としての機能を十分に発揮でき

るように大空間が確保されて、現在にいたっている。

平成元年(1989年)に大学院重点化計画が浮上した後は、大学全体の基本的視点がグレンジリサーチ ユニバーシティ型の大学を実現することに向けられた。この過程において、教養部を改組して学部4年一環の基礎教育重視型の学部教育システムが検討された結果、平成7年(1995年)度以降に大学院重点化構想が全学的に順次に実現された。

平成8年(1996年)に、文部省学術審議会からユニバーシティミュージアム構想の最終答申が出されて、1年に国立大学1校に博物館が設置されることになった。第1陣として東京大学の総合研究資料館が東京大学総合研究博物館に転換された。平成9年(1997年)に京都大学(総合博物館)、平成10年(1998年)に東北大学(総合学術博物館)と続き、平成11年(1999年)に本学(総合博物館)となった。

平成7年(1995年)に北海道大学総長に就任された丹保仁 工学部教授は、21世紀の第1年目(平成13年、西暦2001年)に創基125周年を迎える時期に合わせて、「ユニバーシティミュージアム(北海道大学総合博物館)」を設置することを目標とした計画を発足させた。幸いに、平成11年(1999年)に「北海道大学総合博物館」の設立が見込まれることとなったので、理学部研究棟の新築移転構想の進展に伴い、理学部本館建物を総合博物館として再利用する計画



門標:前出副学長・若松事務局長・南組会長・小泉館長ら

が浮上し、平成10年(1998年)に理学部地球惑星科学分野の“モデル展示”をすることとなった。平成13年(2001年)9月の創基125周年では、記念展示が理学部本館の1階で開催され、展示の内容と充実ぶりが注目の的となった。

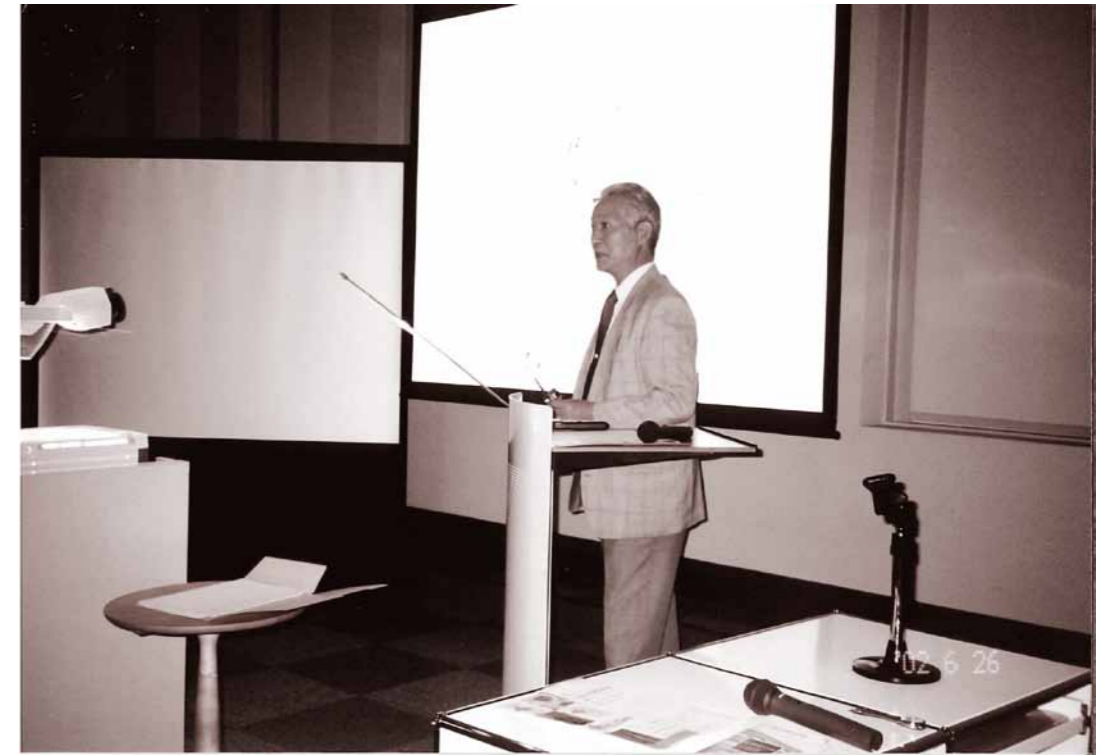
北海道大学の敷地は、サケやマスが遡上した清冽なサクシュコトニ川のほとりに先史時代の集落が存在した歴史層の上部にある。歴史の伝道としてのユニバーシティミュージアム(北海道大学総合博物館)の意義のある創基125周年までに設立することは開学以来の全学の願望であった。

「北海道大学総合博物館」を発展させるための課題は、(1)設立のコンセプト(概念)である大学院重点化と学部一環教育を「縦の糸」に、学術標本と資料からの情報を「横の糸」にして、開学以来のリベラルアーツの伝統に基づく「歴史に学び、生き方を考え、人を育てる」ことを充実させること、(2)本学の研究教育施設は各地に点在しているので、それらを紹介する窓口としての総合博物館のサテライト化構想を実現すること、(3)教育研究機関として、一般博物館では実現し難い実験的な展示を行うパイロットミュージアムとして、最近飛躍的に増大している知見を統合する斬新なアイデアを実現すること、(4)常に歴史を踏まえた現在との接点で展示する必要があるが、さらに深化・発展する地球・世界とともに存続することを意識した未来像・未来ビジョンを提示することが重要である。

歴代館長からのメッセージ④

諏訪 正明

(北海道大学総合博物館2代目館長)

●在任期間:1999年4月
～2001年3月

総合博物館の展示は本学の歴史から始まっています。正面玄関から左へ順路を辿り右側2つ目の部屋に入ると、クラーク先生と学生たちの冬の手稲山登山が、またホイラーとペンハローの若い先生が学生たちと行った豊平川や石狩川の流域調査が、左の壁一面を使って紹介されております。北海道は開拓が緒に就いたばかりで、自然の調査と資源の探索が急務でありました。当時の野外調査は探検であり、冒険でもあったことでしょう。札幌農学校には開校当初からフロンティア・スピリットが溢れていました。爾来本学ではフィールドワークが日常的な手法であり、多くの資料、標本が蓄積されてきました。

増加する一方の資料や標本の安全管理と有効活用のために総合博物館の必要性が早くから認識され、昭和40年代当初にはその青写真も描かれましたが、実現することはありませんでした。いづこの大学も、歴史があればあるほど、膨大な資料・標本の管理活用に悩んできましたが、その困惑の聲が結実したのが、平成7年6月に文部省学術審議会から提出された「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」の中間報告でありました。これにより平成8年から14年にかけて、旧帝国大学7校と鹿児島大学と

の計8校に大学博物館が設置され、その影響は多くの大学へと波及していきました。

追い風が吹いたとは言え、概算要求案件として整えることは容易ではありません。この事案を大蔵省や総務庁に認めさせる立場の文部省の担当官は矢継ぎ早に注文をつけて来ます。設置準備の委員の先生方は皆どなたも四苦八苦されたことです。前任の阿部永先生が定年退官されたため、委員を引き継いだ私は無い知恵を絞ることになり、情報収集では大原昌宏先生に随分と助けてもらいました。日帰り予定で臨んだ文部省でのヒアリングが長時間に及んで当日中に帰れできなくなり、宿探しに苦労したりもしました。標本は貴重だけでは話にならない、インパクトのある情報は?と問われた時に、増田道夫先生が、本学における海藻研究は宮部金吾先生からの伝統ある学問分野であり、現在注力している紅藻ソゾ属の研究では、その産生する化合物の有する抗菌・殺菌作用などの有用性が明らかになりつつあって、今後の展開が期待されていると話され、大いに感心されたことです。

こうして、平成11年4月に4番目の大学博物館として北海道大学総合博物館は設置されました。初代館長の小泉格先生と関連

分野の先生方のお骨折りで前年の11月に公開された地球惑星科学分野の先行展示が好評で、新設博物館の存在を大いに喧伝してくれました。

基礎固めをされた小泉先生の後を受けて、平成13年4月に2代目館長を拝命しました。この年の秋には本学創基125周年記念の特別展示が予定されており、建物の改修と展示の具体化が同時に進められ、関係の諸先生、事務方は大変な毎日でした。

科学技術の研究成果は他大学にも同様の事例があり得ますが、歴史はそこに特有です。クラーク先生や新渡戸先生が居た札幌農学校。そこでの先人の奮闘が今日の北海道大学へとつながり、私たちがいます。北海道大学総合博物館ではかなりのスペースを使って北大の歴史を紹介しております。この展示は、今も平成遠友夜学校の校長を務める藤田正一先生とそのお仲間の先生方の熱意の賜物であり、本学に「通底する精神」としてクラーク精神を掲げ、高邁なる大志 Lofty Ambition の系譜を示して、今にエールを送り続けています。様々な展示に好みの分かれる来館者の方々も、この本学特有の歴史展示には等しく興味を示されるものと推察・期待しております。

歴代館長からのメッセージ⑤

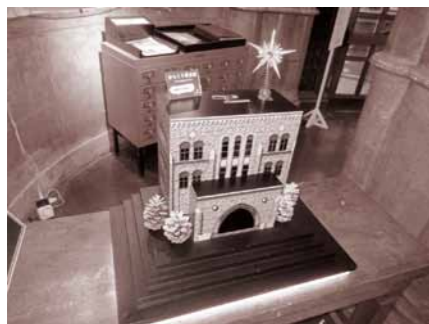
藤田 正一

(北海道大学総合博物館3代目館長)

●在任期間:2003年4月～2007年3月

私が諏訪館長の跡を継いで3代目の総合博物館長となった頃は、博物館はまだ発展途上であり、学内での存在感も認知度も希薄であった。札幌農学校以来の膨大な標本・資料の収蔵スペースの確保は急務であり、またスタッフの充足、展示のための年次予算の請求先さえ定かではなかったのである。私はことあるごとに担当副学長や、事務局のもとに足を運んでこれらの善処を求めると共に、大学博物館の重要性を説いた。クラーク博士以来の、実物に触れる教育手法の重要性、世界中の研究者に対する標本維持の責任、また、当時、大学のアカウントビリティ(説明責任)や、社会貢献、敷居を低くすることなどが文科省から強く求められていたが、大学博物館はそれらを行う格好の施設である。大学博物館は、大学の社会へ開いた窓である。一般の人でもここに入れば大学の学問文化に触れることができ、この窓から大学の文化の香りが社会へあふれ出るような存在にしたいものである、等々。

当時博物館が置かれた旧理学部本館は、理学部退去後、相当部分が博物館に改装されることになってはいたが、この空きスペースが学内の別の部局の改修の避難場所として使われ、内部は傷む一方で、一向に博物館への改装が進まないのが当時の状況であった。これを打破すべく、大学首脳部や施設部と交渉を重ねた。なんとか私の任期中に約束のスペースの一部が博物館側に引き渡され、これを簡易改修して、展示・収蔵スペースが倍増した。人員の拡充につ



当時のクリアーなアクリル製の箱から進化した現在の募金箱



2003年北大OB学長懇談会の様子

いても、何度か陳情に上がり、2名しかなかった教授のポジションに追加の1名を確保した。さらに運営体制を強化するために、博物館教授には副館長職を兼務してもらうこととした。

大学首脳に博物館予算の交渉をする過程で、入館料を徴収するよう、かなりの圧力を感じた。私は、博物館は大学の研究成果を市民に還元する施設であり、税金を払っている市民に大学の研究を見ていただくのに、さらに入館料を取るというのはおかしいと主張、さらに、博物館法の原則無料という条文を持ち出し、これに抗うと同時に、募金箱の設置を認めてもらうよう要請した。「国立施設で募金箱を置くことは難しい、大学博物館にその前例がない」との事務局の返事であった。「前例がなければ我々が作ればいい」と、何回か話題に出すうち、一人の事務官、南さんという方が、文科省と交渉して、適切な手続きをとり、募金箱の設置を可能にしてくれた。今もある募金箱はそうした経緯で設置可能になったものである。

当時、大学博物館協議会というものがある年持ち回りで開催されていた。未だきちんとした博物館を持つ大学は少なく、小規模な展示施設があるのみで、予算規模も少ない大学が多く、協議会は情報交換と、悪く言えば愚痴の交換の場であった。私の任期中に北大主催の番が回ってきた(2006年)。私は、せっかくの機会であるので、この協議会をよりアカデミックで前向きなものとするため、これに学会形式の研究発表の場を併せて開催することを考えて博物館の教員に計

り、賛同を得た。この発表の場の名称を博物科学会(仮称)とし、第一回博物科学会を主宰・試行することとした。幸い、各大学から口頭発表やポスター発表の申し込みもあり、曲がりなりにも学会らしきものが開催できた。現北大総合博物館教授の湯浅先生が東大の研究者として発表をされていたのを覚えている。この時の博物館協議会の総会で今後このような形で博物科学会を維持してゆくことが決定された。私は第一回を主宰した経験から、博物科学会会則の原案を作り、博物科学会検討WG世話人の松枝教授に託した。博物科学会が学会たる体裁を整えて今日まで継続していることを嬉しく思うと同時に、諸氏の努力に感謝したい。

未来へ

北大総合博物館が大改修を経て、格段に進化して素晴らしい施設になったことを祝福するとともに、ここまでの長い道を思い、その過程で色々苦労された諸氏の努力の蓄積の力に敬服し、またその蓄積の一端に、館長として、微力ではあったが、私も僅かながら貢献し得たことに喜びを覚えます。今、北大総合博物館は入館者も格段に増え、評価も高い。今まではそこを目指して努力してきた。それが達成された今、しかし、そこに安住してしまえば、博物館の発展はない。博物館員各自の研究の深化はもとより、次世代につなげる博物館のあり方と使命を考えていかなければならない。博物館員の創意と検討に期待したい。

歴代館長からのメッセージ⑥

馬渡 駿介

(北海道大学総合博物館4代目館長)

●在任期間:2007年4月～2010年3月



写真

2020年11月末、植物分類学の高橋英樹教授(陰では桃太郎と呼んでいました!)の後任として2019年4月に着任した首藤光太郎助教から原稿依頼のメールが届きました。1400字ほど書けとのこと。参考として北海道大学総合博物館ニュース(以下博物館ニュース)のバックナンバーが数冊後日届きました。私こと、北大を定年退職して以来早10年、後期高齢者年齢を目前にして、最後の勤務場所である総合博物館の記憶も薄れてきています。しかし頼まれた以上何か書かねばと考えていたところ、在任中、総合博物館の活動に関する印刷物をまとめていて、

そのファイルが確かあったはずだと思い出しました。本棚を探したところ、頑丈なファイルケースが出てきました。中身の一部をお見せします(写真)。印刷物を眺め、内容を読み始めると、10年前が次第に思い出されてきました。写真とか、印刷物とか、文章とか…これらはすべてデジタル化できますが、昔は“モノ”として扱われていました。“モノ”を保管する、それこそが博物館の存在理由であることは今も変わりません。ただ、かつての“モノ”のうちのいくつかはデジタル化できる故に“モノ”ではなくなりつつあります。時代

の流れを改めて実感します。

“時を戻そう!”。ファイルの内容物から総合博物館のかつての活動を追ってみます。当時の博物館ニュースは現在のモノに比べるとデザインがダサイですが、カラー印刷で、英語名の「The Hokkaido University Museum News」よりも日本語名の「北海道大学総合博物館ニュース」が大きくあしらわれています。博物館ニュース15号には、私の館長就任挨拶として、博物館の役割を延々と述べた文章が載っています。さらに、20号では「展示物が動かないなら入館者に動いてもらったら?」と題する文章を書き、動物園と比較することで自然史博物館の役割を浮き彫りにしています。

私が館長に就任したのは2007年4月、藤田正一教授の後任でした。退任は定年退職と同じく2010年3月で、大学生活最後の丸々3年間総合博物館でお世話になりました。実は総合博物館長に就任する以前、私は大学での役職をバカにしていました。何で学部長とか学長とかになりたがる奴がいるのだろうと。大学に職を得たのは研究したいからで、役職に就いたらその研究が出来なくなるじゃないか…という理屈です。ですから私はそれまで一切役職に就いていませんでした(人望がなくて役職への誘いなど皆無だった!…と言うのが本当のところですが)。大学の役職に興味はありませんでしたが、博物館、特に自然史博物館への思いは熱くありました。自然史博物館は私の専門である分類学と切っても切れない関係にあります。自然史博物館は分類学のメッカなのです。そしてこの思いは総合博物館長就任快諾を後押しし、国立沖縄自然史博物館設立活動へとつながることになります。北大を定年退職後の私の活動に関しては、(一社)国立沖縄自然史博物館設立準備委員会のホームページ(<https://sites.google.com/view/okinawa-natural-history-museum>)をご覧ください。幸いです。

さて、写真には、博物館長時代に企画して実行した催し物のポスターやパンフレットがいくつか載っています。レイチェル・カーソン展、洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源展、アラスカの恐竜展、そして生物多様な部屋—北大分類学の系譜—、そして、定年退職間近に行った「博物館まつり!」……、思い出は尽きません。

歴代館長からのメッセージ⑦

中川 光弘

(北海道大学総合博物館7代目館長)

●在任期間:2015年4月～2019年3月

私の館長在任期間中の最大の出来事は、2016年7月26日のリニューアルオープンであった(写真1)。その前年の4月に第7代目の館長を拝命したと同時に、耐震改修工事そしてリニューアルオープンに向けて、博物館は全館休館となった。その後の1年余りの間、博物館の教員・職員そしてボランティアの皆さんの、リニューアルに向けての献身的な活動に頭が下がる思いであった。この間の私は何をしていたかという、新しい展示である学部展示新設のため学内部局との調整などでお手伝いをさせていただくと共に、数々の懸案事項解決のために大学執行部や事務当局と折衝を重ねるなど、結構忙しい日々であった。当時は国の財政の悪化により、大学においても運営費交付金の削減、それに伴う予算・人員削減が避けられない状態であった。そのため、博物館においても独自の経費確保に努力すべきで、例えば「入館料」の徴取を考えるべきではないか、という声が強くなってきた。詳しい経緯は省略するが、大学当局の理解により、入館料徴取は見送られ、現在に至っている。運営交付金と人員の削減は今も避けられない状況が続くが、入館料無料という方針は、大学博物館の理念を考えると、堅持すべきことだ

写真1 リニューアルオープンのテープカット。右端が著者。



と思う。そしてリニューアル後の賑わいは皆さんご存じのとおりで、それまで年間10万強であった入館者数はうなぎ上りとなり、2018年度には年間20万を超えるようになった。その過程を経験できたことは本当に幸せであった。

同じく就任1年目の2016年2月には函館キャンパスの水産科学館に、水産生物標本館が竣工した。これは水産科学館の懸案であった。標本の収納・管理するスペースが確保できただけでなく、研究の場も確保できた点でも有意義であった。しかし一方で、築60年を超える水産科学館本館は、耐震基準を満たすための改修工事も困難なほど老朽化が進み閉鎖に至っている。私は満足な展示スペースがない水産科学館の状況の改善が、次の大きな課題と考えた。そして博物館若手教職員でWGを作り、新築ある

いは函館キャンパス内での展示スペース作りなどを検討した。その結果、私の任期の最終年度には展示施設建設の概算要求が認められそうどころまでいったが、最終的には実現できなかった。今後の課題のひとつである。

もうひとつ大きな目標として取り組んできたことに、いわゆる「キャンパスミュージアム」構想がある。北大内には400万点を超える学術資料・標本が、複数の組織に分散して保管されている。これら資料・標本の管理と利活用のシステムを一元化することは重要である。そのために、「北大新学術収蔵庫」を設立し、その運営を総合博物館が複数組織と連携して行うことを計画した。数年間にわたり、植物園をはじめ文書館や図書館とも何度も話し合い、共同して計画を練り上げ概算要求として提案を繰り返した。その計画は現時点では夢かもしれないが、総合博物館が学内外の関係者・賛同者を巻き込んで、活動してゆくことがなによりも重要であろう。

総合博物館は、学内においては教育研究環境の強化の場として、学外に対しては生涯教育や知的拠点として社会還元の間として、北大を代表する施設として認知されている。また、国内の大学博物館の中では突出した入館者数を誇り、研究成果や北大の魅力を発信する場として、「北大ブランド」の広告塔の役割も果たしている。そのような場で、4年間の館長として働くことができたことについて、関係者の皆様に深く感謝します。最後に、総合博物館設立20周年に際して、総合博物館の更なる発展を祈念したいと思います。

歴代館長からのメッセージ⑧

矢部 衛

(北海道大学総合博物館水産科学館初代館長)

●在任期間:2007年4月～2016年3月

水産科学館は2007年4月に北大総合博物館の初めての分館として開設したが、北大総合博物館が1999年に設置された時点で、水産科学館の前身である北大水産学部の水産資料館が機能的には総合博物館の傘下に加わっていた。それは総合博物館の構想の中で、水産学部は水産資料館の建物は学部の管理施設とするが、収蔵されている標本・資料は総合博物館に移管するとの認識で対応し、1999年から総合博物館の教員1名が水産資料館に常駐し、水産資料館の標本類の維持管理などの業務を行っていたからである。そして2007年に水産資料館の建物も水産学部から総合博物館へ正式に移管された。

水産科学館の展示施設である水産科学館・本館(延べ面積402㎡)と別館(延べ面積332㎡)は水産学部同窓会からの寄附建物で、それぞれ水産学部の創基50周年と75周年の記念事業として1957年と1983年に建てられた。また、大洋漁業株式会社からの寄附建物であった1960年築の旧・北洋水産研究館を1988年から水産生物標本館(延べ面積666㎡)としてリサイクル活用し

ていた。いずれの施設も老朽化が進んでいたが、特に魚類などの20万点以上の学術標本を収蔵する標本館は築後約50年を経て、耐震強度や作業環境などの面で極めて厳しい状態にあった。そのため分館化以前から標本館を改築する概算要求を毎年のように申請していたが、水産部局内順位を上げることができなかった。

分館後には概算要求を総合博物館として申請することになったが、その内容は総経費5億円規模で、展示公開の機能と標本収蔵の機能を併せ持つ床面積1,300㎡程度の新水産科学館を新設するものであった。この申請を数年間出し続け、2011年には北大内の審査を経てようやく文科省レベルまで達したが、その先はまだ遠かった。そして、2013年の文科省ヒアリングでは、この申請は概算要求としては規模が小さく、緊急度の高いものなら北大自体の予算でできる範囲ではないかとの指摘があった。これを受けて、当時の津曲館長とともに北大事務本部と協議を重ねた結果、新しい建物は2年後に終了する北大の第2期中期目標・計画の期間中の予算で建設し、その規模は当初の申請額の約1/3とすることになった。予算規模が圧縮されたため、展示と標本収

蔵の機能を兼ね備えた建物は望めなかったが、大学の博物館としては大学の教育・研究に供する学術標本を維持管理することを優先するべきと判断し、水産生物標本館を建て替えることとした。具体的には今までの標本館を取壊した跡地に約580㎡の1階建ての新施設を建設し、標本収納スペースには約520台の標本棚を移動棚として設置し、また約290㎡の屋外スペースにホルマリン液浸標本用の約20台のFRP製大型ケースなどを設置することとした。この新築工事は2015年度事業であるため工事スケジュールは、7月末までに工事業者の選定・入札を終え、8月末までに標本の仮移動、9月に旧・標本館を取壊し、10月から建物の建設工事に入り1月末に終了、2月には移動棚を搬入・設置して、3月中旬までに標本の戻しの移動作業を行う強行軍であったが、年度末までに新標本館の新営事業を完了させることができた。この年度末に定年をむかえた私自身にとっては、長年の夢であった新標本館を実現できたことに、大きな達成感をもって水産科学館の館長を辞することができた。今は老朽化がさらに進んだ水産科学館本館などの展示施設の課題の解決を大いに期待している。



旧標本館



新標本館

2019年にご逝去されました5代目館長松大治枝先生、2020年にご逝去されました6代目館長津曲敏郎先生にも、当館発展のためにご尽力いただきましたこと感謝申し上げます。



写真2 洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会との相互協力協定調印式。中央が著者。

コロナウイルス感染防止による 臨時休館、再開について

新型コロナの感染拡大に伴い、北海道は令和2年2月28日から3月19日まで緊急事態を宣言しました。それに合わせて当館は2月29日から臨時休館を決定しました。その後も、感染者数の動向をみながら再開のタイミングを計っていましたが、臨時休館は継続されていました。臨時休館の間、当館の内部で「再開すべきかどうか」「再開するにはどのように対応すべきか」という課題の議論が続いていました。そこで、6月中旬に「新型コロナ対策WG」を設立し、当館の再開を検討し議論しました。新型コロナ対策WGで議論の中心になったのは、ウイルスを博物館内に入れないこと、博物館内の感染拡大を防止すること、感染拡大が認められたときに速やかに連絡することといったポイントを中心に対策し、入館者の安全・受付スタッフの安全・大学教職員・ボランティアの安全をいかに維持するかと言うことでした。

ウイルスを博物館に入れないために、博物館入り口での対応を強化しました。まず、博物館の入り口の一本化です。当館は、入り口が複数あるため、人の流れを制限し把握するために、入館する人は全て正面入口から入るということを決めました。次に、マスク着用の有無を瞬時に感知する検温器を設置しています。この機器は、マスク不着用や体温の異常を感知すると自動音声で注意してくれるもので、受付スタッフが口頭で注意するときの飛沫を避ける

ものです。来館者は一人ずつ検温器の前に立ち、異常のないことが確認されたら入館をしていただいています。入館した方は、連絡先の記入またはQRコードで登録をすることを願っています。記入で使用されたペンは、毎回紫外線で処理しています。記入登録を終えた入館者には、隣に設置されたアルコール消毒液で手を消毒することを願っています。これら一連の作業によってウイルスが博物館に入る可能性が最小限になっています。受付のスタッフは、マスクとフェイスシールドを着用し、来館者と一定の距離を持って対応しています。

次に、博物館内の感染拡大を防止するために、いくつかの対策を行いました。まずは、博物館内の触れる展示をなくすことでした。当館には、「ハンズオン展示」といったモノに触れもらう展示物があったのですが、それらを撤去または触れないようにというサインを設置しています。当館には、展示ケースが多数使われており、それら全てに触らないようお願いするサインも設置しました。博物館再開前に、当館の教職員で博物館を周り、一つ一つ細かくチェックし、触らないようお願いするサインを設置しています。また、イスも各所に設置されているので、イスの数を減らし、隣が座れないようにサインを付けています。博物館の中で、触れざるを得ないのが、階段の手すりとエレベーターのボタン、そしてトイレです。階段の手すりは定期

的に消毒します。エレベーター内に、アルコールを設置しています。トイレは洗面台に石鹸、自動乾燥機の使用中止、トイレの出たところにもアルコールを設置しました。最後に、博物館の換気のため、強制的に空気の流れを出すために大きな扇風機を設置し、さらに数カ所の窓に網戸をつけ、開館時は10センチ程度開ける処置をしています。冬季の換気については、抗菌・抗ウイルスの加湿器を設置して対応しています。博物館導線の終わりの方には、カフェとショップがあります。ここでも、レジでの対応を検討し、テーブルの位置を調整し数を減らしました。今は、テーブルにアクリル板を設置しています。

最後に、感染拡大が認められたときに速やかに連絡するについては、先に述べたように入り口の登録とQRコード、そして緊急時には受付スタッフから教職員への速やかに行える連絡網を確認しました。

私たちは新型コロナ感染拡大防止の対策が十分に取れることを確認し、7月14日に再開しました。現在も博物館は開館しています。今後も、感染拡大防止の対策をとりながら、皆さんに安心して博物館を楽しんでいただきたいと思っています。

小林 快次
(研究部教授/古生物学)

サインやマニュアルの作成について



作成したサインの掲示風景

北大総合博物館では新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて2月29日(土)から休館となり、7月14日(火)から再開いたしました。新型コロナウイルスはなかなか収束の気配を見せずにいます。

このコロナ禍の影響で博物館では様々な感染防止対策を行いながら開館することとなり、私たち研究支援推進員室のメンバーも博物館のコロナ対策ワーキンググループのメンバーとしてマニュアルやサインの作成を行ってまいりました。具体的には、博物館入口に感染対策として気をつけていただく点を示したサインの設置、検温のための動線の想定、受付さんの対応やホール利用などのマニュアル検討、展示室やカフェでのソーシャルディスタンスを守るためのサイン設置、展示ケースに触らないでいただくためのサイン設置などです。

これまでとは違い、入館の際にマスク着用が必須となり、検温をしてから入館いただくかたちとなりました。博物館正面のスペースはそこまで広くないので、どのように動線を設定すればリスクを少なくすることができるのか、効率的に案内をすることができるのかという点は悩みどころでした。また新たに設置しなければならないサインも多く、それぞれのデザインをするうえで簡潔に分かりやすく伝えるデザインを心がけましたが、正解がないので多様な世代が来る博物館でのデザインは改めて難しいなと感じる機会となりました。博物館でのイベン

トなども中止となっており寂しい部分もありますが、この期間をプラスに捉えてこれまでなかなか出来ていなかった資料・資材の整理や、Facebookでの発信強化なども行っています。コロナ禍が落ち着いたあともいろいろな状況が変化すると思われまますので、先を見据えて行動していきたいです。感染者数の増加など、その時々状況によって、新たな対策を取らねばならないことも出てくるかと思いますが、引き続き状況に合わせて柔軟に対応していきたいと思えます。

澤出 有里
(研究支援推進員)



受付でのコロナ対策

中止・延期になったイベント等

●2020/2/26

ポプラチェンバロミニコンサート

●2020/2/29 - 2020/3/1

卒論ポスター発表会

●2020/3/3 - 2020/4/26

山本純一写真展

「カムイの大地 北海道・新風景」

●2020/3/7

バイオメティクス市民セミナー・対話篇
アントロポセン(人新世)とバイオメティクス
その6:コミュニティ

●2020/3/14

第12回土曜市民セミナー

「カムイの大地—北海道・新風景—
撮影秘話『冬・春編』」

●2020/3/22

ポプラチェンバロ

博物館で親しむバロック音楽

●2020/4/29 -

第2農場屋内施設公開

●2020/5/16 - 2020/7/8

地質の日記念展示

●2020/7/19 - 2020/9/29

夏季企画展示



『北大総合博物館の すごい標本』発刊

北大総合博物館が創立20周年を迎えた2019年度に、『北大総合博物館のすごい標本』（北海道大学総合博物館編・北海道新聞社発行）が発刊されました。当館を総合的にご紹介する初めての書籍です。

1999年の創立以来、歴代館長の小泉格先生と諏訪正明先生、藤田正一先生、馬渡駿介先生、松枝大治先生、津曲敏郎先生、中川光弘先生、小澤丈夫先生、水産科学館の矢部衛先生、今村央先生のリードのもと、北海道大学と学内外のさまざまな機関からご支援いただき、研究部と資料部、事務部のスタッフが多くのボランティアの方々からのご協力を得て博物館活動を展開してきました。当館では「モノ」「コト」「ヒト」を結びつけることを意識しています。「モノ」は学術標本の他にも、90年余りの歴史を刻む建物や空間など。「コト」はこれらに情報が付与されていくこと。「ヒト」は過去から現在そして今後も博物館活動に関与するさまざまな人や来館者など。大学博物館として、札幌農学校時代以来収集している約300万点の学術標本の保管・整理を続け、学術標本に基づいた新たな研究を進展させています。そして、博物館の資源を活かした学生教育を行い、市民の生涯学習を広く支援しています。このような営みの全体像をお伝えすることを目的に、『北大総合博物館のすごい標本』が編まれました。

「すごい標本百選」のパートでは、10分野について当館での標本研究とコレクションについて解説し、それぞれ10点の学術標本を紹介しています。標本の解説だけでなく、背景



にある研究者の営みを文章で伝え、標本のもつアウラをビジュアルで示すことを意識しました。「博物学者列伝」では各分野の研究者について、研究の意義や研究者としてのエピソードをお伝えしています。「道具箱」では各分野の研究に欠かせない道具を通して、フィールドワークの様子や研究のプロセスを提示しています。書籍の冒頭では、標本研究だけではない博物館の幅広い営みに関する取材記事が展開されます。

読み物としてもビジュアルブックとしても多くの方にお届けしたい1冊に仕上がっています。どのページから読んでいただいても結構です。当館の活動のさまざまな局面をイメージしていただいたり、当館を訪れた時間に思いを馳せていただきながら、この書籍をご覧ください。ぜひ来館いただきたいと思います。

書籍の企画から編集まで全局面にご尽力下さった仮屋志郎さん、博物館活動のエッセンスを生き生きとした取材記事にまとめて下

さった北室かず子さん、標本や建物・空間のもつ力を写真によって表現して下さいました。酒井広司さん、そして印象的なデザインでこの書籍を形創って下さった畠山尚さんに、この誌面を借りてお礼申し上げます。

この書籍に関連して小澤館長と各分野の教員によるビデオクリップを2020年10月から当館のFacebookで順次公開しています。ミュージアムショップで展開している関連グッズもぜひご覧ください。

『北大総合博物館のすごい標本』

目次(一部)

●すごい標本百選

陸上植物、菌類、藻類、昆虫、魚類、無脊椎動物、古生物、岩石・鉱物、考古、学術資料アーカイブ・科学機器

●博物学者列伝

宮部金吾、館脇操、伊藤誠哉、山田幸男、松村松年、尼岡邦夫、内田亨、長尾巧、北大学術映像の系譜

●道具箱

未来へつなぐ標本固定テープ、多様な「戦略」染めるメルツァー液、細胞を守る吸水紙、繊細さを留める展翅版、色味を残す撮影セット、マイクロームで極薄切り、恐竜発掘七つ道具、物騒なハンマーたち、「たんぼ」が写し取る本質、製造から半世紀なおも現役フィルム編集機

執筆：

阿部剛史、江田真毅、大原昌宏*、柁原宏（大学院理学研究院）、小林孝人、小林快次*、首藤光太郎、田城文人、西村智弘（むかわ町穂別博物館）、山下俊介、山本順司、湯浅万紀子*（*編集担当）

湯浅 万紀子

（研究部教授／博物館教育学）

豪雨で被災した前原勘次郎コレクション (植物標本)の修復作業

昨年7月の豪雨によって球磨川が氾濫し、熊本県の人吉城歴史館とともに、同館が収蔵していた植物標本が被災しました。被災した標本は前原勘次郎氏(1890-1975)によって戦前から戦後にかけて採集されたもので、点数は3万点以上とされています。このコレクションは前原氏が執筆した『南肥植物誌』の証拠標本であり、中には同氏によって採集されたタイプ標本も少なからず含まれているとされ、学術的に非常に重要なものです。そこで、全国およそ40の博物館や大学が協力して、標本の修復に取り組むこととなりました。北海道大学総合博物館も標本を受け入れ、植物標本ボランティアを中心に標本の修復を行っています。

標本が到着したのは7月20日でした。冷凍庫のサイズを考え、段ボール箱8箱分の標本を受け入れました。中身を確認すると、泥水のかぶり具合は標本によって様々であったものの、台紙まで全体的に浸水している標本も多く、すでにカビや腐敗の進行が見られました。これ以上の進行を一刻も早く防ぐため、まずはビニール袋のチャック袋に小分けにして、冷凍保存することにしました。作業を急ぐ必要があったために冷凍前に標本の点数を数える余裕がなく、また後述するようにまだすべての修

復が終わったわけではありませんので、受け入れた標本点数は現在も不明です。しかし、状態の確認中に、クマガワナンテンハギ *Vicia austrohigoensis* Hondaのアイソシタイプと思われる標本を発見しました。前原氏が採集した標本に基づき、東京大学教授を務めた本田正次が発表した植物です。発表に用いられた標本は東京大学に保管されていますが、今回の標本はその重複標本であり、非常に貴重です。この標本の修復だけは失敗できないと、身が引き締まりました。

植物標本ボランティアの活動再開とともに、標本の修復が始まることとなりました。活動日ごとに小分けにした標本を解凍し、少しずつ修復・乾燥を進めています。修復の手順は、被災状況によって様々です。標本は台紙に貼られ、古い新聞紙に挟まれた状態で保存されていましたが、浸水の程度が比較的軽いものでは、新聞紙と標本が張り付かないように不織布を標本と新聞紙の間に挟み、乾燥作業に入ります。標本全体が浸水し泥水を多くかぶった標本や、カビや腐食の進行が著しい標本では、それぞれ乾燥前に標本を洗浄する、あるいはエタノールを用いて殺菌するといった手順が必要になります。これらの作業は、標本に人体



被災したクマガワナンテンハギのアイソシタイプと思われる標本（2020年7月20日撮影）

に有害な細菌やカビが付着している可能性があるため、マスクと手袋を着用して行います。当館の植物標本ボランティアが被災した標本の修復に取り組むのは実は今回で三度目で、慣れた手付きで作業を進めていました。また今回は、農学部植物生態・体系学研究室(植物園)に所属する学生にも手伝っていただきました。

次に乾燥です。植物標本専用の乾燥マットに挟んだ上で、乾燥機にかけます。マットに乾燥剤(塩化カルシウム)が含まれており、新聞紙よりも効率よく乾燥させることができます。しかし、通常の標本よりも多くの水分を含んでいるため、乾燥も一筋縄では行きませんでした。通常の植物標本では一晩で乾燥できることもありますが(種類や量によります)、場合によっては一週間弱かかったものもありました。

秋以降は、新たに寄贈を受けたコレクションの整理に取り組む必要があったため、現在修復作業は一時休止しています。ちょうど引き受けた標本の半分程度まで終わったところで、クマガワナンテンハギのタイプ標本もまだ修復できていません。年度末までには、すべての修復作業を終えたいと考えています。

首藤 光太郎

（研究部助教／植物体系学）



修復作業の様子(2020年7月27日撮影)



プレスリリース

イチヤクソウのアルビノを札幌で発見 ～ラン科以外の被子植物で初～

イチヤクソウの
アルビノ個体がなぜ重要か？

札幌市内に生育するイチヤクソウ(ツツジ科)の白化個体(アルビノ)を、ラン科以外の被子植物から初めて発見しました(写真1)。研究の詳しい内容についてはインターネット上で公開されているプレスリリース(https://www.hokudai.ac.jp/news/200421_pr2.pdf)を参照していただくこととして、ここではアルビノ発見の価値を理解するための研究背景について、少し詳しく紹介します。

大多数の植物は光合成によって有機物を合成し成長しますが、中には他者の有機物に依存して生育する例外もあります。依存の方法は2通りが知られており、ヤドリギのように他の植物が合成した有機物を得るものを寄生植物、地下の菌根菌から有機物を得るものを菌従属栄養植物(または腐生植物)といいます。彼らの多くは、光をめぐる競争を行う必要がないために、普通の植物とは一風変わった見た目や生態を持っています(写真2)。

私は、大学院生時代から菌従属栄養植物の風変わりな特徴がどのように進化してきた



写真2 完全菌従属栄養植物サカナラン
(2019年5月25日苫小牧市で撮影)。



写真1 発見したイチヤクソウのアルビノ(2018年7月18日札幌市内で撮影)。左の丸い2枚はアルビノの葉。

かに注目した研究を行ってきました。多くの菌従属栄養植物は、最も近縁な緑葉植物と系統的にかけ離れています。加えて風変わりな見た目・生態によって緑葉植物との比較が困難なため、その進化の過程には未だ多くの謎が残されています。

菌従属栄養植物の進化過程を探る手がかりとして注目されてきたのが、光合成と菌従属栄養を同時に行う部分的菌従属栄養植物(または混合栄養植物)です。ラン科やツツジ科といった一部の分類群に知られ、北大キャンパス内では5月から6月にかけて白い花を咲かせるクゲヌマランが代表的です。緑葉を持ち、見た目も普通の植物とあまり変わりません。しかしながら、一部の光合成を行わない完全菌従属栄養植物は、部分的菌従属栄養段階を経て進化したと考えられており、菌従属栄養植物の進化を研究する上で見逃せない植物群の一つです。

さて、ラン科の部分的菌従属栄養植物には、しばしばアルビノが生じることが知られていました。葉緑素を失っているため光合成ができませんが、菌従属栄養により成長が可能です。このようなアルビノもまた、菌従属栄養植物の進化過程を探る重要な手がかりです。アルビノは完全菌従属栄養状態にあり、部分的菌従属栄養植物とほぼ同じ遺伝的背景をもつため、比較に適しています。これまで、ラン科のアルビノを利用した様々な研究が行われてきました。一方で、インターネット上ではアルビノと思われるイチヤクソウ属(ツツジ科)の写真も公開されていました。しかし、共同研究者(神戸大学末次健司准教授)とともに長年探し続

けてきましたが、なかなか発見することができずにいました。

念願が叶ったのは2018年、札幌市在住の田島裕子さんがツイッターで公開していた、植物体が白いイチヤクソウの写真を見かけたのがきっかけでした。その年の7月に現地を案内していただき、研究が始まりました。形態観察と塩基配列(DNA)からイチヤクソウと同一、クロロフィル蛍光と葉緑素量の計測により実際に光合成を行っていないことを確かめ、炭素と窒素の安定同位体比分析によって通常のイチヤクソウよりも高い菌従属栄養性をもつことを示しました。この発見によって、これまでラン科で進められてきたアルビノを用いた菌従属栄養植物の研究が、系統的に離れたツツジ科でも可能になり、複数の系統で進化を比較できるようになります。なお、この発見の後、別の研究グループが千葉県でもイチヤクソウのアルビノを発見し、研究成果が公表されました。アルビノを使った今後の研究の展開から目が離せません。

書誌情報: Shutoh K, Tajima Y, Matsubayashi J, Tayasu I, Kato S, Shiga T, Suetsugu K. 2020. Evidence for newly discovered albino mutants in a pyroloid: implication for the nutritional mode in the genus *Pyrola*. *American Journal of Botany* 107(4):650–657. doi: 10.1002/ajb2.1462

首藤 光太郎
(研究部助教/植物体系学)

プレスリリース

北極圏の植物食性恐竜、エドモントサウルスの全貌が明らかに ～日本に恐竜が渡るまで～

アラスカの恐竜エドモントサウルスは、
カムイサウルスの親戚

北極圏は気温が低く、冬になると日照時間が制限され、餌資源も限定される、生物にとって厳しい環境です。白亜紀末(約6,900万年前)においても、気温こそ現代よりも高いものの厳しい環境でした。近年の研究により、そんな北極圏には多種多様な恐竜類が生息していたことがわかりつつあります。数多くの足跡化石に加え、ティラノサウルス類ナヌークサウルスや角竜類パキリノサウルスの骨格化石も見つかっています。なかでも多くの骨格化石が見つかっているのが、米国アラスカ州のノースロープ郡に露出するプリンスクリーク層の、リスコム骨化石密集層です。この化石産地からは植物食性恐竜ハドロサウルス科が見つかり、これまで6,000以上の骨が回収されています(図1)。

2016年に行われた研究により、このハドロサウルス科はハドロサウルス亜科(空洞なトサカを持たないハドロサウルス科恐竜)の新属新種として「ウグルナルク・クークピケンシス(*Ugrunaaluk kuukpikensis*)」と命名されました。しかしこの恐竜は大人の骨がほとんど見つからないこと、動物の骨の形状は成長に伴って大きく変化することから、この分類群の有効性(独立した属か否か)が疑問視されていました。加えて2019年には私たちの研究

チームが、同じリスコム骨密集層からランベオサウルス亜科(空洞なトサカをもつハドロサウルス科)を発見し、同時代・同地域に少なくとも二種の近縁な恐竜が生息していたことを解明しました。このことから、「ウグルナルク」属が複数種からなる「キメラ」である可能性を指摘しました。

北極圏という極限環境下における恐竜類の適応戦略を知るためには、その基盤となる分類体系の確立は必須となります。加えてアラスカ州は白亜紀後期当時、ベーリング陸橋を通じて北米とアジアの窓口となっていた重要地域であり、一部の恐竜類はここを通じて両大陸を移動していたと考えられています。アジア側の出入口付近である日本・北海道からもハドロサウルス亜科の全身骨格が発見され、私たちの研究チームは新属新種の恐竜として「カムイサウルス・ジャポニクス(*Kamuysaurus japonicus*)」と命名しています。カムイサウルスと併せて、アラスカ州のハドロサウルス亜科の分類体系を明らかにすることは、ハドロサウルス科恐竜類がその進化の過程で極域環境にどのように適応したのか、極域環境はハドロサウルス科の北米-アジア間の『渡り』を妨げたのか否かといった疑問を解き明かすうえで極めて重要な意味を持ちます。



図2 アラスカ州のハドロサウルス科エドモントサウルスの復元画(©服部雅人)

研究の結果、アラスカ州のハドロサウルス亜科恐竜はエドモントサウルス属であり(図2)、先行研究で付けられた名前「ウグルナルク・クークピケンシス」は無効名であると結論づけました。また、エドモントサウルス属と北海道のカムイサウルス属は近縁な恐竜類だということがわかりました。エドモントサウルス属とカムイサウルス属は、ほぼ同年代に生息していました。この少し前の時代に、かれらエドモントサウルス族の共通祖先は北極圏の環境に適応し、現代のアラスカを通じてアジアと北米、二つの大陸にまたがって分布していたと考えられ、北極圏の厳しい環境は北米-アジア間の障壁とはならず、ある程度の移動が可能だったと思われる。その中で、北米に定着・進化したものがエドモントサウルス属に、アジアの中で更に多様化し、中でも日本に渡った種が最終的にカムイサウルス属に進化したのです。私たちは、この研究成果を2020年5月7日公開の国際科学誌「PLoS ONE」に発表しました。

小林 快次
(研究部教授/古生物学)



図1 アラスカ州のハドロサウルス科。復元骨格(左)と産状の一例(右)。

バランスドオーシャンと 展示連携



カードの例 001_ マルチプルコアラー (Multiple core sampler)

バランスドオーシャンという言葉を目にしたことは無くても、総合博物館2階水産学部展示スペースの一角で、海に関するカードを配布していることをご存知の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

バランスドオーシャンは、「海のトップサイエンティストの早期発掘と育成」を目指した教育プログラム事業です。本学水産科学研究所と北方生物圏フィールド科学センター水圏ス

テーションが中心となり、海に関するオンライン教材を広く公開しています。教材は、Moodleに搭載されたオンラインコース群とYoutubeに搭載した動画群で構成され、それぞれ400余のコース、100本以上を現在公開しています。

上述の展示室で配布しているカード(現在23種)には、海の生物や観測機器の写真・解説文とともに、関連する動画やコースにリンクするQRコードを付けています。スマホをQRコードにかざして海に関するコンテンツを気軽にお楽しみいただくとともに、海や水圏に関する研究の道に誘う仕掛けにもなっています。バランスドオーシャンでは、水産科学館での博物館実習の様子を伝える動画やバックヤードを案内する動画教材も公開中／公開予定です。博物館に関心のある方にも視聴をお勧めいたします。今後はカードと展示物との連携をさらに進めていく予定です。

カードは札幌キャンパスの総合博物館だけでなく、函館キャンパスの水産科学館、海洋センターなどでも配布しています。ぜひお手に取ってバランスドオーシャンを通じた海の学びを楽しんでいただければと思います。
(<https://repun-app.fish.hokudai.ac.jp/> もしくは“LASBOS”で検索。)

山下 俊介
(資料部研究員/水産学部特任助教)

北側階段に 手すり・防護柵を設置



当博物館の階段は、1929年(昭和4年)に理学部本館として建築された当時から現在まで使用しておりますが、北側、中央、南側の3階段については建築基準法第25条に定められている、手すり(握り棒)が未設置の状態でした。また、階段吹抜に面する側壁が低く、階

段利用者の転落事故等に繋がる恐れがあることから危険防止のための安全対策を検討しておりました。

今回は、感染防止対策による臨時休館期間中の3月後半に博物館来館者の観覧コースとなっている北側階段に手すり・転落防護柵の設置工事を実施いたしました。

階段手すりを建築基準法に適應させ、階段利用者の転落防止措置を施すことで、来館者の皆様に安全・安心に観覧利用していただけるよう配慮いたしました。

設置した転落防護柵には、築90年を超える歴史的建築物である博物館の落ち着いた雰囲気と調和したデザインを施しております。

今後、未設置の階段についても安全対策を講じる予定です。

井上 猛
(事務部係長)

道立北方民族博物館移動展示

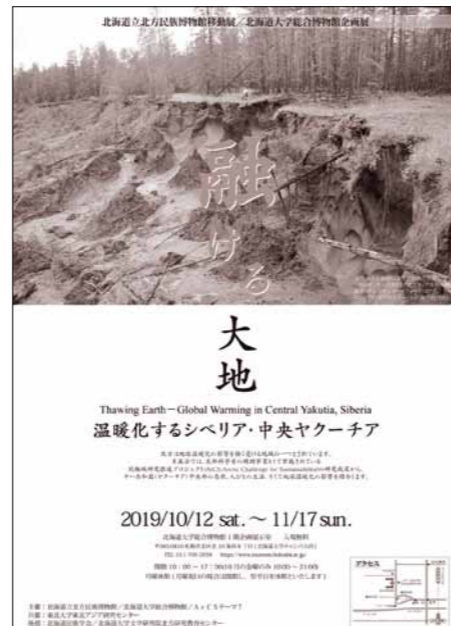
「融ける大地:温暖化するシベリア・中央ヤクーチア」

●2019年10月12日～11月17日

地球温暖化はさまざまな地域や分野で問題となっています。とりわけ北方地域は影響を強く受けやすく深刻です。2019年10月12日～11月17日に開催された、本企画展では、サハ共和国(ヤクーチア)中央部の自然と人々の生活と、当地での地球温暖化の影響について、パネルと写真をもちいて展示・解説しました。本展示は、当館の協定館でもある道立北方民族博(網走市)の平成30年度企画展として実施された展示を、両館の巡回移動展として企画したことになります。道立北方民族博物館、ArCSテーマ7の主催、北大文学研究院北方研究教育センター、北大スラブ・ユーラシア研究センター、北海道民族学会の後援を受けました。地球温暖化には学内外の関心が高いと思われ、多くの来館者が訪れました。

本展示は、本館の元館長であられ、また北方民族博の館長であられた津曲敏郎名誉教授のご尽力で開催されたものでした。先生は2020年10月にご逝去され、本展示が両博物館にとって、先生と一緒にさせていただいた最後の仕事となりました。この場を借りて、先生へ感謝とご冥福をお祈り申し上げます。

大原 昌宏
(研究部教授/昆虫体系学)

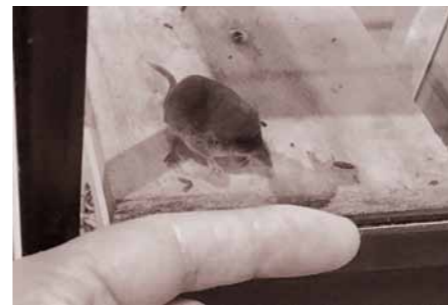


展示

「小さなちいさな哺乳類 トガリネズミ展」

—私たちはけっして「鼠」の仲間ではありません!

●2019年11月12日～12月26日



展示されていたトウキョウトガリネズミ(チビトガリネズミ)と筆者の人の差し指

トガリネズミ科動物はモグラやハリネズミの仲間(真無盲腸目)で、主にユーラシア、アフリカ、北米に360種以上がいます。日本には12種が生息しており、北海道には5種のトガリネズミ科動物が生息しています。2018年度は北海道産の4種のトガリネズミ類を同時に展示しました。しかし、ほとんどの見学者は「ネズミ(齧歯目)とトガリネズミ類(真無盲腸目)を混同しているようでした。そこで2019年度では、この「勘違い」を正すべく、トガリネズミ類とネズミ類の違いを理解してもらう展示を企画しました。トガリネズミ類に関しては共同研究者の河原淳さん提供のチビトガリネズミとオオアシトガリネズミの2種の生体展示となりました。一方、齧歯類はエゾヤチネズミとアカネズミの2種類のを展示しました。ところがチビトガリネズミが12月3日に死亡し、途中からオオアシトガリネズミだけになりました。それでも毎日のように見学にこられるリピーターもいました。また新聞、ラジオ、ケーブルテレビのマスコミ取材を合計5回も受けるなど、本企画は注目されました。

今回も前回と同様に8名の北大の学部生と1名の大学院生にボランティアとして協力をいただきました。彼らは正式な博物館ボランティアではありませんが、彼らなしには本企画は成功しませんでした。また学生にとっても博物館においての実務活動を行えるという貴重な体験をしたことと思います。

大館 智志
(資料部研究員/低温科学研究所助教)

写真パネル展

冷たい海の大冒険!!! 関 勝則が写す北の海の生き物

●2019年12月17日～2020年2月16日

写真家の関 勝則さんの海中写真パネル展を開催しました(釧路市立博物館・北大総合博物館主催、釧路自然史研究会、釧路市立博物館友の会共催、船の科学館「海の学びミュージアムサポート」2017年度協力、知床ダイビング企画特別協力)。関さんは、「ダーウィンが来た!」「さわやか自然百景」「ワイルドライフ」といった自然番組の水中撮影を数多く手がけられる写真家です。今回は道東の海中の

自然と生物の写真パネル17枚(A0～A2サイズ)と、同地域の四季おりおりの海中、川中の素晴らしい映像で、展示構成されました。冷たい海中をダイナミックに泳ぐイカ、色鮮やかなエビや魚、大きくゆらめく昆布、カメラの目の前で大きく口を開けるトドの写真、そして岩礁の海に生きる魚たちの映像などを通して、私たちの身近な場所に素敵な大自然があることを実感していただけたと思います。モニターの前に設置したソファには、映像を指差しながら会話をされている親子の姿もみられました。
みなさまご来場どうもありがとうございました。

植松 淳子
(研究支援推進員)



博物館ボランティアによる 展示解説

北大総合博物館の展示では、主としてまず高校生を対象にした解説パネルを設けています。しかし、来館者は高校生に限りません。年代も興味関心も異なる来館者の全ての要望に応える情報を提示するのは、ICTを用いても困難です。そこで重要になるのが、その場で質疑応答できる「人」による解説です。

当館では教職員や学生を含めたボランティアがさまざまなスタイルで解説・案内しており、2018年12月からは毎月一回、週末に、展示解説ボランティアによるグループ解説を実施しています。古生物の部屋に関連した解説が主ですが、北海道大学の歴史や博物館の建物に関する解説も実施しました。この解説のベースとなったのは、理学院自然史科学専攻博物館教育学研究室を2018年度に修了した徳丸

沙耶夏さんの実践的研究「博物館ボランティアの研修プログラムの検討」です。徳丸さんの「展示解説体験プログラム」のもとで、古生物分野の研究者による監修を受けて解説シナリオを完成させ、徳丸さんと受講者相互のディスカッションやビデオレッスンを含めた解説実習などを経験した市民の方々がおの、ボランティアとして展示解説を担当しています。解説には毎回、市民や旅行者など10名以上が参加され、解説をサポートするボランティアが感想を聞き取っています。そして解説後には、展示解説グループを担当する湯浅万紀子教授とともにフィードバックのための時間を設けています。今後、博物館の年次活動報告会で聞き取り調査の結果を報告していきたいと考えています。

湯浅 万紀子
(研究部教授/博物館教育学)

博物館実習

●2020年9月1～4日・7～10日



馬関係のデータベース作成に向けて資料を撮影する第2農場班

9月上旬の8日間、コロナ感染症対策のもと、学芸員実習を行いました。文学部、水産学部、理学院、農学院、水産科学院の8名が全日程に熱心に取り組み、博物館の営みのさまざまな局面への理解を深めました。

午前中の演習では、小澤丈夫館長による講義をはじめ、当館の教員全員が各自の研究と教育、博物館活動について紹介しました。博物館事務係の井上猛係長による博物館運営や事務業務の説明、研究支援推進員の澤出有里さんによる館内サインのパネル制作実習、展示解説ボランティアの笹谷幸恵さんと渡部典子さんによる解説実演も行われました。

午後の実習は2班に分かれて取り組みました。第2農場班では、近藤誠司研究員の指導

のもと、旧札幌農学校第2農場所蔵の未整理の馬関係の資料のデータベースの基礎を構築しました。扱った資料は、フランス語の説明と手描き油彩の馬の絵がセットになった、明治から大正に遡ると思われる品種を学ぶための図版。他に、蹄鉄や鞍、ハミ、鞭などの馬具や教材用の馬の模型、明治期の馬の利用風景写真など多岐にわたります。図版62品種、馬具などの写真55点、馬の利用風景写真36点について、撮影方法を工夫しながら記録し、Excelを利用した台帳を作成しました。その過程で、明治期の北海道での欧米の馬を利用した畜力用農業機械の導入の実態を知ることができました。

地学班では、山本順司准教授担当の鉱物・



カムイサウルスの発掘調査に関する新規展示を制作した地学班

岩石編と小林快次教授と越前谷宏紀研究員担当の古生物編から成る実習が行われました。前者では収蔵庫見学、岩石の照合鑑定、安全・身近・本物・低コストを教材作成の4原則としたマグマ実験や比重実験装置づくりを行い、標本収蔵の現状と課題や、教材制作の実際を学びました。後者では、カムイサウルスの発掘調査の全容と、関連して函淵層を解説する展示の制作に取り組みました。展示内容に関する調査だけでなく、必要な情報を魅力的なデザインで表現していく工夫も学びました。

湯浅 万紀子

(研究部教授/博物館教育学)



函淵層の新規展示を完成させた地学班

学生企画ミュージアムグッズ

「植物・海藻標本クリアカード」

2020年度の理学院専門科目・大学院共通科目「博物館コミュニケーション特論Ⅲミュージアムグッズの企画・開発・評価」から、新たな北海道大学総合博物館のオリジナルグッズとして「植物・海藻標本クリアカード」が開発されました。

総合博物館には陸上植物標本が27万点、海藻標本が14万点保存されていますが、そのほとんどは普段の展示では見ることのできない貴重な標本です。本クリアカードには、このような標本をミュージアムグッズとして紹介することで、商品を手にとったすべての方に北海道や総合博物館をより身近に感じていただきたいという思いが込められています。



標本の選定にあたっては、造形的・色彩的な美しさだけでなく、北海道や北海道大学にゆかりのある標本であることに加え、学術的にも重要な価値のある標本である点を重視しました。そのため、植物・海藻の研究が専門の小亀一弘先生と首藤光太郎先生にご協力いただき、膨大な標本の中から、エゾエンゴサク、レプンアツモリソウ、スサビノリ、ナガバエビモの4種に絞り込みました。

クリアカードは光を透過するため、様々な飾り方が楽しめますし、ポストカードとしての利用も可能です。同封した解説書には、総合博物館における植物・海藻標本に関する情報と各標本に使用された植物の採集地やその特徴なども記載されていますので、そちらにもぜひ目を通していただきたいです。

担当大学院生：安間理子（工学院）・石川ふく（環境科学院）・外山雄貴（総合化学院）・谷口加奈子（理学院）・松田真莉子（文学院）

協力大学院生：山本葉菜（理学院）

監修教員：小亀一弘（理学院）・首藤光太郎（総合博物館）

指導教員：湯浅万紀子（総合博物館）

松田 真莉子

(文学院博士課程3年・ミュージアムマイスター)

卒論ポスター発表会



運営担当学生が制作したプログラム

北海道大学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、来場者にわかりやすく発表して質疑応答する「卒論ポスター発表会」。本学の全人教育の一環として展開しているミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目に位置づけたこの取り組みでは、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目指しています。2020年2月末の週末に第12回発表会を館内の「知の交差点」エリアで開催すべく、準備を進めていました。しかし、開催前夜に、コロナ感染症拡大を避けるための北海道知事からの外出自粛要請を受け、急遽中止しました。

発表には、工学部2名、理学部4名、農学部1名、水産学部2名、文学部1名の計10名が取り組んでいました。中間発表会に3回以上参加して、当館の担当教員の指導を受け、他の発表者や発表会を運営する学生とのディスカッションを重ね、ポスターの内容やデザインを改訂し、説明のリハーサルにも参加していま

した。発表会の運営もまた3名の学部生が担当し、発表者のメッセージなどを掲載したプログラムを制作した他、発表会の会場設営や運営のリハーサルを行っていました。

準備を重ねてきた学生達には来場者に研究をお伝えし質疑応答したり、会をスムーズに運営する経験をしてほしかったと、大変残念に思います。今後、ポスターを展示し、有志による解説を実施する機会を設定することを検討していきます。準備のプロセスを意味づける学生達に考察レポートを、当館ホームページで公開しています。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/cat/project/poster/>

●発表者

佐々木悠貴（工学部）
「北海道における公立学校廃校施設の活用と周辺地域の関係」

2019年度

第2回ボランティア講座 & 交流会

●2020年1月11日

16グループで活動している250名の総合博物館ボランティアに、所属グループ以外の博物館活動にも関心を広げたり、相互交流を図っていただくため、当館ではボランティア講座 & 交流会を開催しています。

2020年度の第2回目は、小澤丈夫館長の土曜市民セミナーでの講演「北海道大学総合博物館とキャンパスミュージアム」をお聞きいた

だき、その後1時間、小澤館長との交流会を実施しました。館長講演では、北大キャンパスと市街地の歴史を辿り、キャンパスマスタープランやエコキャンパス、キャンパスミュージアムに位置づけられた北海道大学の資源、そこで総合博物館が他機関と協力して担う役割などについて、多数の図面や写真とともに解説されました。交流会では、ボランティアの方々には活動内容や博物館への思いを語っていただき、館長講演や博物館、大学に関連したさまざまな事項について意見交換しました。

高田健太郎（理学部）

「むかわ竜(カムイサウルス・ジャポニクス)の骨組織学的研究」

酒井涼香（水産学部）

「環境DNAによるブラウントラウト資源量の評価」

松村大寿（文学部）

「『雨に降られた』は英語で何というのか? —迷惑・不利益を表す前置詞 on に関する研究—」

近藤誠（理学部）

「冬季北海道の降雪粒子を対象とした気象モデルの検証と降雪粒子の雲微物理特性」

福田祐生（理学部）

「北海道で発見された恐竜の爪化石について」

的場竜毅（農学部）

「ミドリヒョウモンメス交尾器に見られる突起状構造とその役割」

齊藤優里（理学部）

「むかわ町穂別の蝦夷層群函淵層から産出した *Kamuysaurus japonicus* の産状について」

丹羽皓太郎（水産学部）

「水産加工業における外国人労働力の現状と課題 —オホーツク海ホタテ漁業に注目して—」

野田暁布（工学部）

「都市空間構造からみた小樽市における空き家の分布傾向と活用可能性」

●運営担当学生

長田幸子（水産学部2年）・上村麻里恵（文学部2年）・小林瑞季（理学部3年）

●担当

澤出有里・山下俊介・湯浅万紀子（総合博物館）

湯浅 万紀子

(研究部教授/博物館教育学)



小澤丈夫館長を囲んで意見交換

湯浅 万紀子

(研究部教授/博物館教育学)

札幌農学校 第2農場ガイドツアー

●2019年10月29日～11月3日



宇野さん撮影、
受付子と解説の様子

恒例となった第2農場のガイド付きツアーを、2019年10月29日(火)～11月3日(日)の6日間、午前と午後の1日2回実施いたしました。昨年よりは天候に恵まれましたが、開催期間がやや短かったせいもあり、参加者は総計

184名と、一昨年ほど多くはなかった結果となりました。11月3日は41名(午前の部12名、午後の部29名)と多数の方に参加いただきました。なお、11月1日にはちょうど当日訪問された「健康づくり研究会」の方々25名が急遽参加されました。解説担当のボランティアさんは、渡部、石田、宇井、大山、稲場、石川、寺西、大沼、橋爪、山田の各氏10名に担当いただきました。毎年担当下さる方ばかりで、解説も板につき、さらに新しい知見等も含めて、充実した活動になったものと思います。例年と同様に、参加者の世代は50～69歳が最も多く、まだ道内の方が63.0%、さらに台湾、中国、上海など海外の方が4名おられました。コメントでは全体に非常に好評で、「非常に良かった」「良かった」が最も多かったです。

近藤 誠司
(資料部研究員/名譽教授)

ミュージアムマイスター認定式

●2020年9月29日



総合博物館では、本学が目指す全人教育の一端を担う教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」を2009年度より展開しています。2019年度後期ミュージアムマイスター認定式が行われ、理学院修士課程2年 谷口加奈子さん、文学院博士課程3年 松田真莉子さんの2名が認定されました。2名の認定で、これまでにミュージアムマイ

スターに認定された学生は41名となりました。

認定式では小澤丈夫館長から認定証が授与され、お二人からは「ミュージアムと市民を繋げる一助となるため活動していきたい。」「実践的な学びを活かし、今後も努力し学び続けたい。」とコメントをいただきました。みなさんがマイスターコースでの経験を生かし、活躍されることを期待いたします。マイスターコースの詳細は、総合博物館のウェブサイトをご覧ください。
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/>

澤出 有里
(研究支援推進員)

ポプラチェンバロ ミュージアムコンサート 朗読とフルートによるHARMONIA

●2020年2月2日

今回のコンサートは、2019年童謡生誕100年で企画したコンサートの3回目となり、バロックから童謡、現代にわたる作品を演奏しました。フルートの平池則雄さん、ヴィオラ・ダ・ガンバの松田祥子さんとのフランスバロックの優雅な作品に浸り、平池吉美さんによる詩の朗読

に耳を傾け、誰もが一度は耳にしたことのある童謡のメロディは、皆様の懐かしい記憶をたどって頂けたのではないかと思います。ポプラチェンバロは、約14年にわたり、文化の香りをお届けし、弾き込むことで、優しく、温もりのある音色に変わってきました。チェンバロは、バロック時代に活躍した楽器ですが、時代を超え、様々なジャンルにも挑戦させてくれるポプラチェンバロでの演奏が、これからも楽しみです。また、今では多くの方々に愛され続けているポプラチェンバロを、これからも大切に見守りたいと思います。



新妻 美紀
(チェンバロボランティア)

宇宙の4Dシアター公演

●2019年10月、12月、2020年2月



「宇宙、いってみる?」2月公演チラシ

総合博物館の人気体験型展示プログラム「宇宙の4Dシアター」。

2019年10月12日に「嘘う月～意外と知らない月のお話～」公演、12月21日に「星と旅路」公演、2020年2月11日に「宇宙、いってみる?」公演を、オリジナルプログラムで開催しました。いずれも満員御礼の公演となりました。4Dシアター運営ボランティアグループでは2020年度も公演を行うべく活動を続けていましたが、コロナ禍への対応のため、まだ公演を行うことができていません。思い起こせば5年ほど前、総合博物館の耐震リニューアルの際も4Dシアターは活動を長期間休止した後、2016年12月に再始動しました。暫くはメンバーが十分に揃わず頭を悩ませましたが、学生参加プロジェクトを組み合わせることで活動全体が活発化しました。趣向を凝らしたユニークな公演が次々と生まれ、自律的で活発なボランティア活動を取り戻していただくことができました。宇宙の4Dシアター運営ボランティアのみなさまの知恵と情熱で、ふたたび新生4Dシアター公演をみせていただきたいと思います。

山下 俊介
(開催当時:研究部助教/映像資料学
現在:資料部研究員/水産学部特任助教)

SPレコード鑑賞会

●2019年10月、12月、2020年2月

2019年8月に開始したSPレコード鑑賞会は、続いて「名演奏家による独奏曲」を10月、第3回「日本の音楽家」を12月、2020年2月に第4回「名指揮者による演奏」を開催しました。音楽にじっくり聞き入る鑑賞を企図した回は総合博物館2階の応接室を会場に設定し、通りかかった来館者が立ち寄れるような気軽さを企図した回は1階のオープンスペース(知の交差点・講演室)を会場に設定しています。鑑賞会のひと月前にはボランティアメンバーがテーマと曲目を勉強する検討会を開催し、鑑賞会での役割を確認して準備を進めます。レコード盤をモチーフにしたデザインのチラシの制作や広報期間もあるため、検討会と鑑賞会を月ごとに交互に開催していく活動ペースが定着し始めていましたが、2020年度はコロナ禍の対応を受けて鑑賞会を開催することはできていません。ようやく秋口にはメンバーによる検討会を慎重に開催することができました。レコードの音色が参加者の心を癒す日を心待ちにしています。

退任の挨拶

2015年から4年9か月の間、総合博物館研究部の教育・メディア系の助教として博物館活動に携わりました。着任してすぐ耐震改修リニューアルに参加し、リニューアルオープン日を逆算して慎重かつ大胆に計画を進めていく先輩館員の姿をつぶさに見ることができました。カフェやオープンスペースの検討チーム、展示リニューアルの目玉であった学部展示のワーキング事務局などに有無を言わずに加えていただき、2016年のオープンが無事にみなさまと一緒に迎えられたことは大変嬉しいことでした。翌2017年の春頃に、次年度の企画展のお鉢が回ってきました。担当している学術資料アーカイブのうち、写真や映像などのビジュアルメディアの資料化を思い切って底上げしたいと考え、企画展の機会と予算を活用すべく志願した形になりました。準備期間の短さにもかかわらず、館内外の有形無形の協力を得ることでビジュアル学術資料をテーマとする企画展「視ることを通して」を2018年に開催すること



第4回 SPレコード鑑賞会(名指揮者による名盤)(2月)チラシ

山下 俊介
(開催当時:研究部助教/映像資料学
現在:資料部研究員/水産学部特任助教)

ことができました。ご協力いただいた皆様に改めて感謝を申し上げます。博物館資料に関しては、実学資料の持続的アーカイブを核とする概算要求案の作成や、北海道遺産でもある札幌農学校第2農場に関する企画も実施することができました。他にも館内研究者のフィールドワーク現場への同行映像撮影やコンテンツ化、博物館実習や学芸員科目、大学院科目、ミュージアムマイスターなどの教育活動、博物館ボランティア活動の支援を担当したほか、博物館研究会などを企画実施し、大学博物館にどっぷりと浸かった濃い時間を過ごしました。この間、種々にご助言、ご支援いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

2020年度以降は、博物館資料部研究員として、また本学バランズドオーシャンプロジェクトのスタッフとして博物館の活動に関わらせていただきます。今後ともよろしく願いいたします。

山下 俊介
(資料部研究員/水産学部特任助教)

2019年度後期
～
2020年度前期

記録

2019年10月から2020年9月までに
行われたセミナー・シンポジウム

バイオメティクス市民セミナー

『ある地質学者からみた人新世

～環境の時空間スケールとは～』

山本 順司（北海道大学総合博物館 准教授）

日時：2019年10月5日（土）13:30～15:30

参加者：60名

土曜市民セミナー

「サハ共和国（ヤクーツク）の環境と民族文化」

中田 篤（北海道立北方民族博物館）

日時：2019年10月12日（土）13:30～15:00

参加者：50名

バイオメティクス市民セミナー

『人新世に生きるヒト

～アラスカの環境人文学から考える～』

近藤 祉秋（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 助教）

日時：2019年11月2日（土）13:30～15:30

参加者：80名

土曜市民セミナー

「下水道の来し方行く末」

佐藤 久（北海道大学大学院工学研究院 教授）

日時：2019年11月9日（土）13:30～15:00

参加者：65名

バイオメティクス市民セミナー

「毒と生物の攻防」

石塚 真由美（北海道大学大学院獣医学研究院 教授）

日時：2019年12月7日（土）13:30～15:30

参加者：80名

土曜市民セミナー

「石狩海岸の海岸砂丘は周回遅れで

先進事例となった！」

松島 肇（北海道大学大学院農学研究員）

日時：2019年12月14日（土）13:30～15:00

参加者：90名

「小さなちいさな哺乳類トガリネズミ」展 公開セミナー

大館 智志（北海道大学低温科学研究所 助教）

河原 淳（環境省希少野生動物種保存推進員）

日時：2019年12月21日（土）13:30～15:00

参加者：60名

バイオメティクス市民セミナー

『アントロポセンと環境倫理』

蔵田 伸雄（北海道大学大学院文学研究院 教授）

日時：2020年1月12日（日）

参加者：72名

土曜市民セミナー

「北海道大学総合博物館とキャンパスミュージアム」

小澤 丈夫（北海道大学総合博物館 館長／工学研究院 教授）

日時：2020年1月11日（土）13:30～15:00

参加者：70名

写真パネル展

「冷たい海の大冒険!!!

～関勝則が写す北の海の生き物～」展 関連セミナー

関 勝則（水中写真家）

日時：2020年1月26日（日）13:30～16:00

参加者：60名

バイオメティクス市民セミナー

「ブラックアウトの教訓とマイクログリッド」

原 亮一（北海道大学大学院情報科学研究科 准教授）

日時：2020年2月1日（土）13:30～15:00

参加者：78名

土曜市民セミナー

「水を通して見る北海道のユニークな生態系」

荒木 仁志（北海道大学大学院農学研究科 教授）

日時：2020年2月15日（土）13:30～15:00

参加者：80名

2019年10月から2020年9月までに

行われたバラタクソノミスト養成講座

昆虫バラタクソノミスト養成講座（初級）

大原 昌宏（北海道大学総合博物館 教授）

日時：2019年10月12日～10月13日

定員：12名 対象：小学4年生以上（参加者12名）

昆虫バラタクソノミスト養成講座（上級）

大原 昌宏（北海道大学総合博物館 教授）

日時：2020年2月22日～2月23日

定員：8名 対象：中学生以上（参加者8名）

植物バラタクソノミスト養成講座（初級）

首藤 光太郎（北海道大学総合博物館 助教）

日時：2020年9月12日

定員：5人 対象：大学生・一般（参加者12名）

昆虫バラタクソノミスト養成講座（初級）

大原 昌宏（北海道大学総合博物館 教授）

日時：2020年9月19日～9月20日

定員：8名 対象：小学4年生以上（参加者8人）

2019年4月から2020年9月までの

主な出来事

2019年10月4日	SPレコード鑑賞会
2019年10月12日	オトナの4Dシアター 嗚う月～意外と知らない月のお話し～
2019年10月12日	北海道立北方民族博物館移動展／北海道大学総合博物館企画展
	融ける大地—温暖化するシベリア・中央ヤクーツク—（～11/17）
2019年10月12日	文部科学省医学教育課長ご一行（3名） 解説
2019年10月29日	重要文化財札幌農学校第2農場ガイドツアー（～11/3）
2019年11月12日	小さなちいさな哺乳類トガリネズミ展（～12/26）
2019年12月17日	釧路市立博物館巡回展写真パネル展 冷たい海の大冒険!!!～関勝則が写す
	北の海の生き物～（～2/16）
2019年12月21日	宇宙の4Dシアター上映会 星と旅路 人びとは星を頼りに旅をした
2019年12月21日	SPレコード鑑賞会
2020年1月14日	第12回博物館研究会「大学教育のeラーニング教材と博物館展示の連携の可能性」
2020年1月25日	国立アイヌ民族博物館PR展示（～2/27）
2020年2月2日	ポブラチェンバロミュージアムコンサート 朗読とフルートによるHARMONIA
2020年2月11日	北海道大学落語研究会 北大総合博物館寄席
2020年2月11日	宇宙の4Dシアター上映会 宇宙、いってみる？
2020年2月22日	SPレコード鑑賞会
2020年2月29日	コロナウイルス感染対策のため臨時休館
2020年3月31日	山下俊介研究部助教 退任
2020年7月14日	開館

入館者数（2019年10月～2020年9月）

	入館者数	見学団体数	解説の件数	企画展示(略称)
10月	29,513	47	12	融ける大地—温暖化するシベリア・中央ヤクーツク—（10/12～）
11月	19,381	18	4	融ける大地—温暖化するシベリア・中央ヤクーツク—（～11/17） 小さなちいさな哺乳類トガリネズミ展（11/12～）
12月	11,582	8	3	小さなちいさな哺乳類トガリネズミ展（～12/26） 写真パネル展 冷たい海の大冒険!!! ～関勝則が写す北の海の生き物（12/17～）
1月	11,554	4	0	写真パネル展 冷たい海の大冒険!!! ～関勝則が写す北の海の生き物
2月	10,310	3	0	写真パネル展 冷たい海の大冒険!!! ～関勝則が写す北の海の生き物（～2/16） 2/29～臨時休館
3月				臨時休館
4月				臨時休館
5月				臨時休館
6月				臨時休館
7月	4,421	休止	休止	～7/13臨時休館
8月	8,743	休止	休止	
9月	8,747	休止	休止	

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。

(令和元年10月1日～令和2年9月30日)

(敬称略)

●植物標本

石田愛子, 蝦名順子, 大原和広, 加藤 恵, 加藤康子, 桂田泰恵, 金上由紀, 菊地敦司, 児玉 諭, 駒谷久子, 坂上美裕己, 嶋崎太郎, 須田 節, 高岡さくら, 高橋美智子, 田端邦子, 中川博之, 新田紀敏, 林 裕子, 藤田 玲, 船迫吉江, 星野フサ, 細川音治, 堀之内詢大, 本多丘人, 松本珠季, 道川富美子, 見原悠美, 目黒嘉子, 矢野ひろ, 吉中弘介, 與那覇モト子, 和久井彬実

●菌類標本

石田多香子, 加藤和子, 鈴木順子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

●昆虫標本

青山慎一, 伊藤優衣, 梅田邦子, 遠藤正樹, 柏崎昭, 川田光政, 喜多尾利枝子, 黒田 哲, 齊藤光信, 櫻井正俊, 佐藤國男, 佐藤拓海, 志津木眞理子, 諏訪正明, 高橋誠一, 竹本拓矢, 問田高宏, 永山 修, 古田未央, 細川真里栄, 松本侑三, 村上麻季, 山本ひとみ, 芳田琢磨, 吉野優希

●考古学

荒谷 博, 安 翔宇, 生田元希, 池澤 泉, 今井彩乃, 内田耕平, 翁 哲毅, 太田 晶, 大泰司紀之, 奥山杏南, 木村則子, 木村映陽, 許 開軒, 工藤智美, 齊藤理恵子, 佐々木征一, 佐々木勇人, 佐藤亜希子, 謝 倩水, 末永義圓, 菅原凧紗, 鈴木 花, ソンチャロエンチャイキット Chorawitt, 竹内 颯, 竹内美音, 田中公教, 田中望羽, 名倉のどか, 二瓶寿信, 濱崎瑠菜, 林和花奈, 久井貴世, 堀 隼輔, 三嶋一輝, 三ツ橋薫, 森北那由多, 森本智郎, 守屋友一朗, 山下真紀, 弓削龍之介, 油島明日香, 廉 暢, 渡辺双葉

●メディア

伊藤優衣, 今野成捷, 周 晨萱, 鈴木陽彦, 卓 彦伶, 武田満希, 藤井真知子, 山田大隆, 山本ひとみ

●化石

朝見寿恵, 荒山和子, 安 翔宇, 飯島正也, 石崎幹男, 市橋晃弥, 糸井容子, 井上竜斗, 白田みゆき, 太田 晶, 大宮 伶, 大村 颯, 小笠原玄記, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 小田嶋一男, 尾上洋子, 金内寿美, 川又いづみ, 岸谷美恵, 木村聖子, 木村映陽, 木村衛朋, 久保孝太, 近藤知子, 近藤弘子, 齊藤優里, 酒井 実, 佐藤健一, 清水洲平, 高崎竜司, 武田満希, 田中公教, 田中望羽, 千葉謙太郎, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 長瀬のぞみ, 本村美奈子, 前田大智, 三嶋一輝, 守屋友一朗, 山内静香, 山角美夏, 山下暁子, 山田佐穂

●北大の歴史展示

高橋道子, 辻本文登, 寺西辰郎

●展示解説

在田一則, 池田玲菜, 石黒弘子, 植木佳子, 太田 晶, 生越昭裕, 尾崎美雪, 河本恵子, 雲中 慧, 佐々木悠貴, 笹谷幸恵, 高崎竜司, 谷口加奈子, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手島 駿, 寺西辰郎, 永岡明美, 成田敦史, 西川笙子, 濱市宗一, 廣瀬由香里, 松田義章, 村上龍子, 山崎敏晴, 山田大隆, ロバート・クルツ, 渡部典子

●翻訳

ロバート・クルツ

●平成遠友夜学校

大山圭也, 柿本恵美, 城下治子, 須田 力, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧野小枝子, 増田文子, 山岸博子

●4Dシアター

安部布実子, 石神早希, 加地麻希子, 加藤啓子, 川名桃子, 佐藤伽奈, 竹中玉絵, 田中裕子, 永井陸, 長谷川健太, 平井由実果, 平田栄夫, 福澄孝博, 増田文子, 劉 鋭, 渡辺眞理子

●ポブラチェンバロ

石川恵子, 小野敏史, 新林俊哉, 高橋美悠, 新妻美紀, 野村さおり, 松田祥子, 雪田理菜子

●図書

岡西滋子, 菅野富美子, 今野成捷, 須藤和子, 高木和恵, 田端邦子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久米進一, 鮎田久意, 星野フサ, 本名百合子, 宮本昌子, 村上龍子, 森 秀代, 山田大隆

●第2農場

石田多香子, 稲場良雄, 宇井康子, 大沼良文, 大山圭也, 木村幸司, 佐々木悠貴, 城下治子, 高井宗宏, 辻 孝太, 寺西辰郎, 橋爪俊明, 山田大隆, 渡部典子, 渡邊雄之介

●ハンズオン

佐藤蓮花, 嶋野月江, 須藤和子, 種市晟子, 仲谷優輝, 花岡 瞳, 濱崎瑠菜, 福澄孝博, 山岸博子

●展示製作支援

在田一則, 金沢 瞳, 佐藤淳子, 佐藤 豪, 清水光希, 鈴木 花, 塚田則生, 寺西辰郎, 平井由実果, 廣瀬由香里, 松田義章, 山本真衣

●きたみてガーデン

片岡奈々, 黒沢邦彦, 駄場優子, 玉田聖司, 富岡那奈子, 豊田真慧, 奈須野恵介, 星野愛花里

●水産科学館

岡本大輝, 小幡光汰, 川上七海, 木村克也, 小泉雄大, 古庄 誠, 酒井涼香, 千田哲朗, 戸叶太郎, 永井 陸, 中條希美, 中山颯斗, 能登雄大, 樋口淳也, 馮 婕, 三品 瑛, 三井洸太郎, 皆川裕斗, 宮崎太一, 横山敢紀

[表紙写真] 『北大総合博物館のすごい標本』(北海道大学総合博物館編・北海道新聞社出版)